さんけん新聞

発行
特例認定NPO法人
三段峡―太田川
流域研究会
（代表・本宮炎）

〒731－3813
広島県山県郡
安芸太田町
柴木1734
090-3421-3046
◇
https://sanken-hiroshima.org/

風力発電計画へ意見書提出

経営姿勢や環境評価の不備指摘

電源開発（本社東京）が安芸太田町、広島市、廿日市市にまたがる山地に計画する大規模風力発電・広島西ウインドファーム事業（仮称）の環境影響配慮書に対するさんけんの意見書と関係市町の住民から託された二百九十三通の意見書を七月二十二日、事業実施想定区域の市町へ提出した。

さんけんの意見書は、理事の調査や主催した勉強会に寄せられた意見を集約して、約一万二千字にまとめた。

意見書では、電気の固定買い取り制度申請期限ありきの事業者の経営姿勢、生態系や自然環境のずさんな影響評価、景観、防災、歴史文化など多岐にわたって、環境影響配慮書の問題点、不備を指摘し再提出を求めた。意見書はさんけんのホームページに掲載している。

環境アセスメントなどの勉強会開催／「広島西ウインドファームを考える会」立ち上げ

環境アセスメントの流れを学んだ勉強会

情報提供・意見交換

さんけんは風力発電計画について七月六日、十一日、十六日に環境アセスメント、生態系、意見書の書き方をテーマに勉強会を開き、延べ八十二人が参加した。

NPO法人湯来観光地域づくり公社理事会（二日）、筒賀の「天上山結クラブ」の発電計画学習会（十四日）、吉和のお母さんグループの会合（十八日）に出かけ、情報提供と意見交換をした。

環境保全事業の一環

さんけんは風力発電に関係する勉強会などの活動に取り組む団体「広島西ウインドファームを考える会」を立ち上げた。

さんけん本来の活動内容からはズレが考えられたが、想定事業区域はさんけんにとって重要な場所であり、環境保全事業として住民への情報提供、話し合いを促す組織に位置付けた。

同会はさんけんの活動原則「調べる、伝える、繋げる」を柱に粘り強く取り組む。動植物や歴史文化、事業計画を分かりやすく、勉強会やネット配信で住民に伝えた。住民間の対立が起きないよう話し合いの場を設け、意見書の執筆を促した。

南峰と歩く ㊱ 三段滝道（さんだんたきみち）

餅ノ木住民が造成、維持に汗

槙ケ瀬を過ぎるとほどなく、絶壁に沿う桟道となり、展望台から雄大な三段滝が望める。多くの人は滝を背に記念撮影して、ここで引き返すが、道は滝の左の急斜面をつづら折りに奥へと続いている。天然石が階段状に組まれ、見た目も自然で歩きやすい。

■「絵を売り金払う」

ほぼ現在につながる本格的な探勝路が完成する一九二九年までは、熊南峰の働きかけや地元民によって簡易な仮の探勝路が造成、維持されていた。三段滝から上流約二キロの餅ノ木までは、桝見府市を中心に、集落の住民達が担っていたと思われる。府市が一七年、三段滝へ南峰を初めて案内し、のちに民宿を営むようになったのは以前述べた。

府市は晩年、手記を残している。三沢という画家が二四年に来て、「絵を売って金を払うから道をつけてほしい」と頼まれたエピソードが記されている。おそらく餅ノ木から三段滝への道だろう。

■南峰と三沢が設計

画家は三沢三千彦（一九〇〇―八二）である。広島県美展の審査員を務め、広島文化賞を受賞した。が、当時は無名の二十代前半、順調に絵が売れたとも思われず、地元名士に借金を申し入れている。探勝路はほとんど南峰と三沢がデザインしたと伝わる。三段峡の文化的恩人である。（松尾　俊孝）

一口メモ

▼ダブルパンチ

梅雨が七月末まで続き、何度も増水した。川底の石が洗われ、透明度が戻ると、いつもにも増して美しい。反面、がけ崩れで一部を除き入峡規制がかけられたままになっている。六月には増水で黒淵の船着き場が砂利で埋まり、営業が二カ月ストップ。コロナウイルスに続き、痛手が辛い。

GreenGiftプロジェクト オンラインで動画作成講座

GreenGiftプロジェクト事業で、オンラインによるYoutube動画作成講座が七月三十一日、さんけんから三人、EPOちゅうごくと広島大学大学院からそれぞれ二人が参加して開かれた。講師は同大学院の中野瑛登さん、シナリオ作成の基礎を九十分学んだ。五回の講座では各自がシナリオを考え、撮影と編集技術を受講する。

野外開催を予定していた今期のプロジェクトは、コロナウイルス感染症のため、動画による三段峡と自然の面白さの紹介に変更した。中野さんは大学紹介動画を制作するなど事業活動をしている。さんけんとは広島大学中坪ゼミとの共同事業で出会った。

補助金・助成金採択

アフターコロナ事業

七月、アフターコロナの誘客事業に対する環境省の補助金とみずほフィナンシャルグループなどが設立したJ―Coin基金からの助成金交付が採択された。環境省へは、西中国山地サスティナブルツーリズム推進協議会として申請した。三段峡や恐羅漢山への誘客が狙い。交付額は七〇〇万円。同基金は講習会やモニターツアーなど地域活性化事業が対象で同二〇〇万円。

◇　◇

堂河内　福夫氏（どうごうち・ふくお＝元戸河内町議会議長）七月二日死去、九〇歳。三段峡開峡に尽力した横川小学校教諭だった斎藤露翠の教え子。さんけんは二〇一八年、露翠の人柄や暮らしぶりを聞いた。露翠の資料閲覧に協力していただいた。

「墨は流すもの―丸木位里の宇宙―」展に寄せて

「東洋繪畫傳統の根本を技術的に獲得」

「墨は流すもの―丸木位里の宇宙―」展が三次市の奥田元宋・小由女美術館で開かれている。八月十六日まで。丸木は一九〇一年、安佐北区安佐町飯室生まれ。三段峡開発に携わった画家、三沢三千彦と親交が深く、三段峡を描いた作品も多い。美術に詳しいさんけん会員の前田准一さんの寄稿を紹介する。

◇　◇

第二次大戦後間もないころ、丸木のアトリエに寄宿していた美術評論家のヨシダヨシエは、のちに広く美術評論やキュレーションを手掛けた。ヨシダは今や伝説的存在である。

今展覧会でも取り上げられた広島画壇の丸木、船田玉樹、靉光らは互いに親密な友人であり、活動を共にするメンバーだった。

丸木は「絵は描くものではない、墨を流すもの」と語り、追求し続けた。船田の用筆用墨は伝統技法の極致と呼べる内容であった。

広島の美術家たちがヨシダら一流の美術批評家やキュレーターを育て、その美術家たちを「南画への憧れ」が育てたのかも知れない。

丸木と彼らが三段峡を描くに至るのは、丸木の言葉を借りるならば、「東洋繪畫傳統の根本を技術的に獲得」したかったのであろう。